平成２０ 年（２００８年）４月２５日（金）　（第４１号）

# 東九州支部報

三月月例山行・小富士山にて　三月一六日

《　も　く　じ　》


| | |
|---|---|
| ２００８年度支部定例総会 | 1 |
| 今年度の月例山行計画 | 2 |
| 蔚山山岳会交流登山について | 2 |
| 胡麻柄山 | 2 |
| 震岳・高畑山 | 3 |
| 小富士山など | 4 |
| 先達を語る⑤「矢野　眞氏」 | 5 |
| マッキンレイ(2) | 6 |
| おきなぐさ | 7 |
| 嗚呼　七年山 | 8 |
| クラブ紹介⑦「豊嶺会」 | 8 |
| 野津原の三角点のある山 | 9 |
| 富山と総会へ | 10 |
| 私の無名山ガイドブック 33 | 10 |
| お知らせ | 11 |
| 後記 | 12 |


## 公益的法人の取り組みなど

## 二〇〇八年度支部定例総会開催

去る四月一二日（土曜日）の午後六時より、大分市のコンパルホール（府内町）の視聴覚室で、二〇〇八年度（平成二〇年度）支部定例総会が開かれた。総会には、会員、会友三十一名（別に委任状六十三名）が出席し、定刻に開会のあと、議長に安東桂三会員を選出して進行した。最初に梅木支部長が挨拶にたち、「今年の一二月に施行される公益法人制度改革法により、社団法人日本山岳会は『一般社団法人』になるか『公益社団法人』になるかの岐路に立たされており、これまで一〇〇年間培ってきた会の多くの蓄積を守るためには『公益社団法人』をめざす、としているが、そのためには事業も公益的事業をたくさん展開しなければならず、支部活動も工夫を加えなければならない時にきている。さらに、あと二年後（平成二二年）には支部創立五〇周年を迎えることになり、その記念事業も実施したいと考えている。そのための準備を、今年度から始めなければならない。そういう面を念頭において総会を活発な議論で成功させて欲しい」と挨拶した。

## 青少年体験登山大会の活性化など

続いて議事に入り、はじめに①二〇〇七年度事業報告、②二〇〇七年度会計決算報告、③会計監査報告がなされ、いずれも報告通りに承認された。

このあと、④二〇〇八年度事業計画が提案され、活発な意見が出された。特に支部活動の中には『公益行事』として「青少年体験登山大会」「視覚障害者支援登山大会」「九重山系清掃・案内板・登山道の補修」などが提案されており、これらをめぐって意見が出された。

青少年体験登山大会については、青少年の参加者が少ないなど形骸化しており、いっそうのＰＲや、会員が各自参加者を募る努力をすることなどをはじめ、いっそうの活性化をはかるために互いに努力しようということになり、さらに役員会で具体的検討をして、実施に努めることとなった。また、視覚障害者支援登山大会については、例年府内山岳会が中心になって行っているが、これに支部としても積極的に参加・支援していくこととなっ

た。

なお、九重山系の清掃等の活動については、今年大分で開かれる国体の取り組みや、他団体の同様の活動の動向等を考慮して、役員会で具体的実施について検討することとなった。

今年度の月例山行は「月の高さの山に登ろう」をテーマに、月数を一〇〇m単位の高さにして、五月は五〇〇m級の山から始めることとなった。

次ぎに、特別議案として出された「東九州支部五〇周年記念事業について」は二〇一〇年に五〇周年を迎えるにあたり、二年前にあたる今年度から準備していくことが提案された。記念行事は結成された八月を実施時期に定めて、記念講演会や資料展示会、祝賀会、記念山行などを行うこととなった。また記念誌の発行については、特に早めに取りかかる必要があるため、安東桂三会員を主任担当者に指名し、準備にかかることとなった。また、記念の海外遠征登山も検討することとなった。そして、これら五〇周年記念事業実施のために実行委員会を設置することとなり、その具体化について役員会で決めることとなった。

このあと、二〇〇八年度会計予算案が提案され、原案通りに承認され、定例総会は終わった。アトラクションは東京農大のエベレスト登頂記録の「ヒマラヤに架ける橋」のDVDの上映があった。

## 月の高さの山に登ろう
## 今年度の月例山行計画

**五月**(500m)…**長峰**・501.5m(佐伯市宇目)、**赤松山**・501.0m(佐伯市宇目)

**六月**(600m)…**鬼下駄**・602.8m(日田市小山町)、**ヘリ山**・610.4m(日田市大山町)

**七月**(700m)…**桂木山**・701.6m(山口県美祢市)、**華山**・713.3m(山口県下関市)**東鳳翩山**・734.2m、**西鳳翩山**・741.9m(山口市)

**八月**(800m)…**熊群山**・804.9m(由布市庄内町)、**白石台**・809.6m(由布市湯布院町)

**九月**(900m)…**門前岳**・921.7m(福岡県矢部村)、**石割岳**・941.5m(福岡県星野村)

**一〇月**(1000m)…**高嶺山**・1006m(日田市前津江町)、**ヒタキ**・1010m(日田市前津江町)**殿尾**・1014.8m(日田市前津江町・中津江町)

**一一月**(1100m)…**高千穂野**・1101.0m(熊本県山都町)、**鞍岳**・1118.3m(熊本県菊池市)

**一二月**(1200m)…**式部岳**・1218.9m(宮崎県西都市)

**一月**(100m)…**琴平山**・102.1m(杵築市)、**遠見塚**115.4m(杵築市)**六郎山**・101.0m(国東市国東町)

**二月**(200m)…**伊勢山**・200m(中津市耶馬渓町)、**猪口山**・206.1m(中津市三光)

**三月**(300m)…**大力山**・304.9m(豊後高田市)、**峠**・305.4m(豊後高田市香々地)

**四月**(400m)…**松ケ内**・400m(佐伯市本匠)**大畑山**・400.3m(佐伯市宇目)、**滝川迫山**・400.2m(佐伯市直川)

## 韓国山岳会蔚山支部との交流登山

恒例となった韓国山岳会蔚山支部との交流登山会は、今年は東九州支部が蔚山支部の皆さんをお迎えする番である。日程は来る五月一五日（木）～一七日（土）で九重山系を中心に行われることとなった。

これまでの連絡で決まっている主な日程は次の通りとなっている。

**五月一五日**（木）一八時より
交流会および懇親会（場所：筋湯温泉「八丁原ヴューホテル」）

**五月一六日**（金）
交流登山（涌蓋山）
ホテル発八：〇〇…地蔵原発八：三〇…涌蓋山一一：〇〇…一目山一五：〇〇…ホテル一六：〇〇

**五月一七日**（土）
交流登山（黒岳）
ホテル発七：三〇…白水鉱泉発八：〇〇…前岳一〇：〇〇…高塚一三：〇〇…天狗一四：〇〇…風穴一五：〇〇…男池一七：三〇（元気コースとゆったりコースに別れ、ゆったりコースは途中から引き返す計画）
（天気や当日のコンディション等で、逆回りコース等に変更する可能性もある）

※ 支部会員・会友のたくさんの参加をお願いします。懇親会、涌蓋山登山、黒岳登山のどれか一つだけでもかまいませんので、参加できる方は支部事務局までご連絡下さい。

（文責 飯田）

## 月例山行報告
## 胡麻柄山（津久見富士）
（一月月例山行）

中野 稔

平成二十年初めての山行会である。すべてに始まりが有るように、いつか終わりもある。子供の頃には考えなかった事が、今では沢山の事を考えるようになって来ている。

今月の富士は津久見富士、別名『胡麻柄山』だ。その名もそれなりのいわれが有って名付られたわけで、インターネットで検索していると、石灰石の採掘で山の形が少しづつ変わって来ているのだ。その典型が水晶山である。津久見柑橘史によると、「神武天皇、皇登山（水晶山）に登らせたまい、土民みかんを献上する」とある。

昭和三十二年には標高二百メートル近くあった山容が、今日では八十メートルそこそこなのだ。昔日の面影はそこにはなく、津久見インターの出入り口になっている。

胡麻柄山は西の碁盤ケ岳から東に延びて海に至る途中にある尾根の一角だ。

（胡麻柄山三角点にて）

例年になく寒く感じる今年の冬だが、夜の帳が残るサニースポーツを六時に登山口と、お昼の猪鍋

を夢見ていざ出陣。明け方から降り続いた雨は終日続いた。津久見インターから国道二一七号線の、約一キロ市内に入った地点から南南西に延びる広い道に下りて来たのだが、ここは石灰石の採掘工場内であり、無断進入禁止である事は百も承知で車を走らせた。

日曜日であり今日は休業だろうという軽いノリで、大山神社のある広場に車を止めさせて貰い、三角点と山頂を目指した。雨の中の七人の侍と言いたいけれど、独り車に残ったのは渋谷の山谷ブルースの為かも知れない。

登り始めて最初のお仕事はリモコン式ゲートを潜ることからである。六人でゲートを潜り、大きく曲がりくねったコンクリートの道を登っていく。降りしきる雨が路面から側溝に集まり、激しい勢いで流れ下っていく。ゲートから約三〇分、地図とGPSで確認して、道路の右手上にある三角点を目指して、林の斜面に取りつく。

稜線の出っ張りの、その端のようなところにある三角点（四四一メートル）は、道路擁壁のコンクリートの吹きつけの中にあり、まるで周りがコンクリートで舗装されている感じで、初めて見る風景だ。

三角点から稜線を二、三分で展望台に着いた。その立派さは、会社が地元の小学生や関心のある人たちの社会見学用に作られたように感じたが、あいにくの天気で展望は全くなかった。近くで一台のブルドーザが活躍していたようだが、雨と霧で確認できなかった。

三角点から胡麻柄山（六〇〇m）の山頂まで行く予定であったが、降りしきる雨と霧で断念した。地図では稜線伝いで登りの筈が、展望台から先はかなりの下りになっているらしい。石灰石の採掘で山容が変化しているのであろうが霧で確認できない。残念無念。晴れていれば多分山頂で記念撮影をしていたと思う。

九時過ぎに神社の前に下山。あとは、今日のお目当ての『シシ鍋』だ。まずは最寄りのスーパーで鍋と野菜、お玉とお酒類、豆腐と肉団子、お餅とうどんなどを調達。次は場所探しだ。つめたい雨はいっこうに止む気配はない。適当な大きさの東屋があればいいがと、場所探しの旅に出かけた。近辺の神社や大友宗麟の墓地公園、路脇の公園など・・・、雨宿りの場所を探して津久見から臼杵にターゲットを変えて、臼杵城を何故か目指した。

臼杵城の登山口を探して車を走らせていたら、突然西さんが「そうだ、やっちゃんに頼もう」その一声で車は「喜楽庵」に向かう。しかし問題はこちらの我儘を、高級料亭がどんなジャッジを下すのだろうか。最近有名なんとか吉兆とは違うけれども、庶民にとっては高値の華に変わりはなく生涯に一度、有るか無いかの懐石の場所だ。

一人で折衝に行った西さんを待つことしばし・・・。やがて門の方から帰ってきた西さんが、遠くで大きく両手を丸めてOKのサイン。鶴の一声は健在だったという事らしい。

料亭の結婚式披露宴会場で、場違いな野趣の『シシ鍋』だ。今年の暮れの忘年会の下見となる。頭の中では、豪華なふぐ鍋に至福のひと時を過ごしている筈なのだが、目の前には猪が！喜楽庵の主人と女将さんに感謝、感謝ですね。

行きは九六位トンネルを通ったが、帰りは臼杵駅でトイレ休憩、国道二一七号線から白山の東隣の若山（四二一メートル）の真下を通る臼坂トンネルを通った。

参加者…西、飯田、石川、遠江、岐部、久保、中野

コースタイム…大山神社7：27～胡麻柄（三角点）8：05～大山神社9：08

## 震岳（鹿本小富士）、高畑山（河原富士）

（二月月例山行）

中野　稔

今月は熊本詣でだ。日頃同じ処にいると、他の県民の生活を考えることは新聞やTV等のマスコミを通してでしか無い。九州の近県だけの事かも知れないが親しみやすい人々が多い。安心して山々に登れるのも、世界の中でも日本ぐらいだと思う。最も、海外の登山経験が皆無に近い私の所見だが？

住み慣れた地域を遠く離れて見ると、日常生活の大切さを、有難さを痛感させられるものだ。日々の何気ない親切や近所付き合いが、金銀や宝石よりも素晴らしいものだと感謝の念に満たされてくる。無くして初めて感じる失くしたものの大切さを考える日々を送るように。

午前四時に大分を出発、奥産スカイラインから朝地に出て竹田、阿蘇経由で熊本平野に出る、目指す震岳は熊本県北部の山鹿市の中央にある。東に国見山、八方ヶ岳、西に筒ヶ岳があり、登れそうな山が沢山ある低山の宝庫だ。

登山口は北にある庄屋村の中心にある神社だ。七時二十分過ぎに神社脇を出発、踏み跡を辿って北尾根に取りつく、帰りに気付いたがかすかに登山道らしき踏み跡があった。ほぼ一時間で三岳（法華寺）の四等三角点に到着。二次林の樹海で展望無しとくる。

途中木々の間から周囲の山々が見えていたが名前は判らない。一等三角点がある山頂までは一時間二十分の尾根歩きとくる。高度差は百八十メートルだが、距離は一、二キロ近くあり帰りもほぼ一時間かかった。

震岳の山頂は植林の中で展望は無い。ここで二十五分近くとどまり、三名は西南の尾根を目指し麓の寺島の田園地帯に下ることになり、運転手は同じ道を引き返し神社に向かう。十一時半に神社に到着、往復四時間。

（震岳山頂にて）

次の高畑山は阿蘇山の外輪山の一角にあり、東に冠岳、北東に俵山、北西に熊本飛行場がある。然るべき所から見れば必ず富士山に見える筈だ。どんな人も長所だけを見れば素晴らしい人間であるようにと私は思う。

車は来た道を大津まで引き返し、阿蘇郡西原村を目指す。阿蘇ミルク牧場、種雄牛センターを東に向かう。十文字の手前の峠が高畑山の登山口だ。そこで昼食となる。

登山口とあまり高さの変わらない山頂目指して出発。高原の牧草地の様な雰囲気で、作業道を緩く

下り、植林と雑草の藪尾根に分け入る。山頂まで踏み跡がある。三角点の脇にある岩の上からはかなりの展望が得られた。熊本市街地が一望だ。しかし、かなりの靄で、飛行場も震岳も見えている筈だが判らない。

高度差は二十メートル、往復一・四キロ、行き二十分、帰り十五分であった。

（高畑山にて）

二時五十分に次の山、阿蘇盆地の中にある米塚を目指す。十文字を過ぎると地蔵峠に出るが恐怖のアイスバーンの峠だ。通行止めの標識を確認しながら地蔵峠を飯田さんの手招きで二、三百メートル下ると、後は普通の状態。米塚は二度目位だ。柵の一角に登山禁止の立て看板がしっかりと行く手を阻む。二度三度読み返すうちに、悲しい現実が浮き彫りとなる。遠くから見れば美しい姿も近くで見れば、四駆の轍が米塚を切り裂くように横切っているのだ。エベレストの清掃登山で数百キロの塵が集まるように、富士山でもそれ以上の塵が集まる筈だ。それは近隣の山でも同じような規模で集まるだろう。日本では登山とは無縁の車や家電製品、家庭ごみ、産業廃棄物さえも集まる筈だ。山登りを楽しむというより、山の環境破壊の視察、自然破壊の調査登山と名前を変えたくなる。

参加者…西、飯田、石川、岐部、中野

# 小富士山など

（三月月例山行）

久保洋一

今月の『富士』の山は竹田の小富士山だ。この山は竹田市の中心から南南東に三ｋｍくらいの位置にある。私たちは山の南側を流れている緒方川を、原尻の滝を経由して上流に上がっていき、寺原から林道を車で登っていった。

尾根付近まで登りつくと、鋭角に戻る形でさらにトラバースしながら林道を上っていく。二五〇ｍほど登り、車は林道の脇に止めていよいよ徒歩で登山開始。七時四一分。

石川さんが最初に林道の脇から道もないところに分け入る。みんなも続き、すぐに登山道らしき道に合流。その道にそって尾根にたどりつく。あとは尾根沿いに登ってあっけなく山頂へ。小富士山山頂（456.7m）八時〇〇分到着。

山頂には立派な石祠が鎮座している。山頂で三角点を囲んで記念撮影をし、下山。下りは登ってきた尾根を引き続きそのまま進んで下りた。車に戻り近くにある中川家墓所へ移動。小富士山は双頭峰でもう一つのピークが中川家の墓所のあるところだ。ここは岡藩主八代中川久貞の墓所だ。公園のようになっていてよく整備されている。まわりの景色とあいまって小鳥の鳴き声がここちよい。

次に向かったのが小苑、ここは先ほどの小富士山から北東に直線距離で一・五ｋｍほどのところにある三角点である。林道を引き返し、行きに登りついた鋭角の交差点を越えてさらに進む。尾根道だからそんなにカーブもしておらず快適である。一〇分ほども車で走ると小苑の三角点の場所についた。車から降りて林道の脇道を水平に五〇ｍほど移動し、道からそれて四・五ｍほどの高さを登るとそこが三角点だった。小苑三角点（449.9m）到着時間八時五七分。三角点の近くには新しい石碑があった。車を降りて三角点までの所要時間五分。

（小苑三角点の石碑前で）

次に目指した三角点は草深野。ここは小苑三角点（325.6m）から北北東に直線距離で二ｋｍほどのところ。車に戻り林道をそのまま先に進む。九時一八分三角点到着。三角点は農協（？）の倉庫の横にある広い駐車場のかどにあった。道の横に石碑がありその後ろあたりだ。ここはまわり一面の畑で祖母山、傾山、久住連山、由布山まで見える。のんびりしていてとてもいいところだった。

次に向かったのが観音山。これは草深野の三角点から見ると北東に一・二ｋｍの場所にある。車道を下りながらさらに進むと一旦、三重～竹田線の国道五〇二号線に出て、少し三重方面に行ったところから脇道に入り、二五〇ｍほど進むと資材置場みたいな広場に出た。広場の一角に車を止め、コンクリート舗装した道を登る。めじろが高音をあげている、とてものどかな日和だ。二〇〇ｍほども行くと登り着いた。正面に観音堂がある。古い建物だが屋根は最近葺き替えたのか妙に新しい。境内の一角に三角点があった。観音山（310.2m）九時四六分着。

まだ時間が早いのでもう一つ三角点を踏んでお昼をとることになった。向かった先は荒平山。この山は今まで登った（？）四つの三角点とは緒方川を隔てて反対側にある山だ。観音山からは南南東の方向に直線距離で五～六ｋｍほどのところにある。車で三〇分ほど移動し林道の脇に車を止め、スギ林の中を登っていく。数分で稜線に出て、右折するとヤブこぎとなる。斜面は次第に急になり、そのまま直登していく。急な登りでみんな息があがっている。二〇分ほどの登りで山頂に着いた。山頂には大きな電波塔があった。反対側

（荒平山にて）

には車道が上ってきていた。電波塔をつくるために設置した新しい道のようだ。荒平山（366.7m）一〇時四七分到着。

お昼には『しし鍋』をするというので三重町の方へ移動。途中コンビニに寄って鍋に不足分の材料を買って、三重町の南西約四kmの位置にある本城山へと林道を上っていく。

上り着いたところが山頂直下で、駐車場もある草の広場となっている。この山はハングライダーの練習場になっているので、関係者用の駐車場を確保しているのだろう。草の広場でシシ鍋の開始だ。鍋をかこんで楽しんだ。みんなの顔に笑みがこぼれる。屋外で食べる鍋のなんと美味しいことか。

（本城山にて）

食後本城山に登る。駐車場からはすぐだ。一五分も登れば山頂につく。本城山山頂（440.1m）一三時四四分着。山頂はハングライダーの出発場になっており、一面に絨毯のようなシートがかぶせてあった。午後になりかすんできてあまり眺望はきかない。でも飯田さんに桑原山、木山内岳などを同定してもらった。

その後も三角点を追い求めて山旅だ。先ずは木ノ元山（237.5m）。三重町の北にある山で道路から入るコンクリート舗装の道には鎖のゲートがある。ゲートから急なコンクリートの道を一五分の登りで山頂だ。一四時三七分着。ここにも電波塔がある。三角点のそばには他では見たこともない大きなマキの木があった。

次は大辻山（249.4m）、頂上のそばまで車で行ける。一四時五九分着。ここは山頂が公園のようになっている。駐車場は舗装していてとても広く、トイレも完備している。少し上った山頂には土を盛った古い墓がいくつもあり、そのうちの一つの上に三角点があった。

帰りの途中にまた少し寄り道。犬飼町の三ノ岳へ。山頂直下まで行き、車を置いておいてちゃんと整備された階段を登っていくと五分ほどで山頂につく。水ノ元（546.3m）の三角点で、一五時四二分着。山頂周辺に木立はなく、とても見晴らしがいい。山頂には天体観測用のドームつきの建物があった。建物のそばの小さな花畑の隅に三角点がある。

（大辻山の古墳山頂）

最後は天面山（403.0m）へ。三ノ岳から林道を行き、頂上手前で車を降り、稜線をたどって約一五分で山頂到着一六時一八分。この山は山頂部が公園のように整備されている。戦国時代の山城の跡で眺望も良い。新緑や紅葉の頃に来ると楽しめそうだ。

以上三月の月例山行報告。あまりに多くの三角点に行ったので、私には記憶にあいまいなピークがあったりで申し訳ないが、それでも報告にはそれらしく書いています。

参加者…西、土居、石川、飯田、岐部、遠江、中野、久保

## シリーズ 支部の先達を語る⑤

今回は日田において歯科医を営むかたわら、若者の登山活動の育成に努められた、矢野　眞氏（1925～1991）（会員番号5399）について、佐藤浩幸副支部長にその思い出話などについて書いて頂きました。

## 矢野　眞氏との出会い

佐藤　浩幸

「昭和三十年（一九五五年）正月、日田高校山岳部合宿、厳寒の久住山に挑む。矢野眞氏（歯科医、日田高校山岳部OB）率いる高校生八名は久大線豊後中村駅よりトラックにて飯田部落に入る。徒歩にて中野温泉に一泊、積雪の中をスガモリ峠を経て久住・御池の東側（標高一七五〇米）にベースキャンプを設営。翌日氷点下の風雪の中を久住山（一七八七米）・中岳・星生山の登頂に成功、翌日夜半、再び中野温泉に下山、四泊五日の冬季合宿を無事終了した。」概略このような記録が残っている。

テントは家型夏用（底なし八名用）寝具はボテボテの毛布を袋状に縫い合わせたもの、マットは炭俵、燃料は固形の物（一個で飯合めしを炊くのに一時間半から二時間を要した）靴は軍靴で底に登山用の鋲、クリンカーとムガーを打ち付けた改造品。吹きさらしの夜営はやたらに寒くてほとんど眠れなかった。

二晩目の夜半に久住南口登山ルートから私達高校生の四年年上のKさんがペンシル型豆電燈一本を頼りに寒風の中を我々のテントの中に飛び込んできた。祖母山、傾山を登り九重連峰へ足をのばしたとの事、矢野先生（歯科医であるから何時の頃からか先生と呼び始める）と連絡をつけていたのか先生は驚いた様子もしなかった。すごい人もいるものだと未だに忘れない。Kさんも又矢野先生の登山仲間で日田高校山岳部の後輩である。

昭和二七年（一九五二年）から始まった日本山岳会によるマナスル遠征計画はこの前年に第二次

遠征隊を送りキャラバン中にラマ教徒の暴動など数々のトラブルで中止となり、二年後の昭和三一年（一九五六年）槇有恒氏を隊長とする第三次隊がようやく登頂に成功している。この快挙は全国に大きく報道された。日本のヒマラヤ登山史の幕開けであった。

冬山登山中、矢野先生の我々高校生に教示する厳冬期登山技術もさる事ながら、九州の山の中の住人にとって到底不可能なヒマラヤ山脈遠征への夢とロマンを語りかけてくれた。

この年の日田山岳会の会報の中の高校生山岳部員へのアンケート「貴方の将来登山したい山」で私は生意気にもダウラギリ峰と答えている。ダウラギリはマナスルから北西にアンナプルナⅠ峰、Ⅱ峰と続く八千米級の大秀峰である。高校卒業後上京して我々のテントに飛び込んできたKさんの下宿に遊びに行った時、押入れの中から門田のピッケルを出して「君はヒマラヤに行け、君ならきっと行ける。」と熱っぽく語ってくれた事を思い出す。矢野先生の伝言でも聞いているような思いであった。

マナスル第二次遠征から十年後、一九六四年アラスカ・ローガン峰の遠征参加の事を父に話したら、父は心配のあまり矢野先生宅へ相談に行ったとの事である。勿論、先生は私を参加させるよう説得した事は当然である。この父の事は数年後先生が話してくれたことであった。その後の私の未知なる世界の登山と旅への憧れ、まさしく矢野先生のさそいであったと思う。

# マッキンレイ（6194m）山行報告②

星子貞夫

**6月6日**　デポ・キャンプ泊

快晴。

真っ白い山々が赤く染まった朝焼けが美しい。こんなに美しい風景がこの世にあるのだろうか。第二中間キャンプで吹雪のため停滞したがその後快晴続きである。

5時00分にテントを撤収して出発し7時30分にデポ・キャンプと呼ばれる地点に着く。此処は多くのテントで花盛りである。ここで再度テントを設営する。デポ・キャンプからは傾斜が急になり、雪面も固くなるのでスノーシューはデポしアイゼンで行動する事になる。一休みして12時25分に出発し、ウインディー・コーナの下部まで半分の荷物を荷揚げし、17時45分にデポ・キャンプに帰った。

テントの中でお湯を飲んで横になっていたが疲労のためそのまま寝込んでしまった。20時頃寒さのため目が覚めたがシュラフを出す気力も無いくらいであった。結局この夜は食事もとらずじまいであった。

（デポ・キャンプ）

**6月7日**　ウインディー・コーナー下部泊

快晴

5時30分起床。気圧663hp天気の周期がよい。次に悪天が来ても2～3日の停滞になるくらいだ。11時にすべてを撤収して又単調な雪の急斜面に踏み出す。昨日の疲れがたまった感じがあったが、歩き出すとリズムが掴めて元気が出た。

朝の$SPO_2$(動脈血酸素飽和度)は92%脈拍80であった。リズムが乱れないように呼吸を整えて急斜面を登り、ウインディー・コーナーに続く尾根上で休憩し、昨日デポしたウインディー・コーナー下部に15時25分に着く。此処は一般にはテント設営点ではないので雪崩の心配があったがここ数日降雪を見ないので安全と判断して一箇所あった抜け殻を利用して幕営する。柔らかい深雪に苦労して17時50分設営完了である。高度4005m気圧614hpであった。

**6月8日**　停滞

風雪

4時に目覚める。外は激しい風雪である。降る雪よりも風で流されて来る雪で、テントが次第に埋まっていく。ウインディー・コーナーを越えて吹いて来るためか、風が息をしている。気圧は616hpで昨夜より2hp上がったが少しも雪が止む気配はない。遂に夜を迎える。

22時頃風が止み、相当に冷え込んできた。マイナス10。であった。

**6月9日**　BC泊

晴のち風雪

前日の風雪も止み、明るい兆しの朝を迎える。テントはうしろ半分が三分の一位雪に埋もれている。雪かきをして10時に出発の予定で準備する。デジカメが低温で作動しなくなるのではないかと、心配であったがシュラフに入れておけば作動する。また日中テントに陽がさせばホカホカを使わなくても大丈夫であった。餅とご飯で味噌汁雑炊の朝食をする。納豆とキムチが美味しい。

8時30分頃より再び風雪となりホワイト・アウトのため行動中止となり、1時間かけてテント周囲の除雪をする。マッキンリーに登るのだと言う実感がなく、毎日雪と戦い。ただ目前の作業を手抜かりなく黙々とこなしている今、これが登山の喜びと言えるのか。天気が気分を滅入らせる。

11時頃8名のクライマーが登っていったが、上からは誰も下って来ない。$SPO_2$ 81% 脈拍84である。

13時40分に今日も停滞と決定する。二日間降った新雪で雪崩の危険レベルが高くなって周囲を見渡して心配していた時現地ガイドが下ってきた。「貴方達はナダレの危険地域にいる、早急に下山するかBCに登るように」と注意を受けた。

警告が出たからには一刻も猶予できない。急遽テントを撤収してソリに載せる荷物は雪中にデポし、テントとシュラフと一泊の食糧をザックに詰めてBCに移動する事になる。

ウインディー・コーナーは風が吹きさらしである。雪は風に飛ばされて岩が出ている。更に峠を過ぎると急傾斜のクレバス帯で足元は氷結した青氷である。巧みにクレバスを避けたトレースを辿って行くと、突然視界が広がり雪の大平原に着く。ここがメディカルキャンプと呼ばれるBCである。

多くのテントと人々の行き交い

を見て、やっとマッキンレイに来たのだと言う気持になった。BCの夜は-15℃であった。

**6月10日　BC泊**

ガス、晴れ、雪

午後昨日のデポ地に下り、デポ品をソリに載せてBCに荷揚げする。ウインディー・コーナーのトラバースでソリは下にぶら下がり、難儀であった。

標高4380mのBCは広い平らな台地である。北はウエスト・バットレスの稜線、東は山頂に至る稜線に囲まれ、南はノースイーストフォーク・カヒルトナ氷河が食い込んでいる。ここは広いテント村である。大小さまざまなテント、人種もさまざま。イギリス、ロシヤ、スペイン、アメリカ、日本、韓国その他東欧の人。皆気軽に挨拶をして出身国を尋ねたり、天気のことなどを話す。

レンジャー・ステーションには太陽電池パネルで発電しており天気予報が表示してある。

マッキンレイは天気との勝負である。予報は当たる時もあれば外れる時もある。要は雲と風を見る観天望気が最も信頼出来る。だがこれがとても難しい。我々は大蔵喜福氏の「マッキンリー　ウエスト・バットレスの気象」と言う論文を参考にして行動した。

BCには大便所が二箇所、小便所が数箇所作られている。大小便は此処でするように決められている。中間キャンプでした大便も此処まで持ち上げて処理した。

（BC）

**6月11日　BC泊**

ガス・雪

10時20分　587hp。5時20分起床。夜中にわずかな降雪があったようだ。外は一面のガスでホワイト・アウトである。体調はすこぶる好調で朝天を向いている。ガスコンロの調子が悪いので、分解掃除をI氏に教わる。新品であったが導管の中にカーボンが付着するので時々分解掃除をする必要がある。ガスの快調な燃焼音を聞いていると心が休まる。

夕方より晴れてくる。当てにならない予報によると、三日間は風が弱くなるとのことである。明日5250mのハイ・キャンプに荷揚げすることになり、個人物資をパッキングをする。

**6月12日　BC泊**

晴

午前中風が少し残ったが昼過ぎより穏やかになる。HCに向けて荷揚げである。次第に傾斜が増してくる。1時間半休みなく歩くと氷壁にぶつかる。此処からヘッド・ウォールと呼ばれる60度の傾斜が稜線の鞍部まで続いている。

ここには固定ロープが約500mにわたってセットしてあり、アッセンダー(登行器)で稜線まで這い上がる。稜線は激しい風が吹いている。BCは周囲がかこまれているので風は比較的穏やかだが、稜線は違っていた。

HCへは急峻で岩と氷のミックスの細い岩稜が続いている。風が強いと危険である。このまま鞍部の吹き溜まりの雪を掘って荷揚げした品物をデポし、固定ザイルを伝ってBCに下る。

## おきなぐさ

## 彦岳山行

蓮谷義雄

桜も満開の四月六日（日）、久しぶりに彦岳に山行した。午前九時五十五分、津久見市彦ノ内トンネル先の登山口から登山開始。

名残の藪椿に迎えられて、雑木林の中を一人で黙々と高度を稼ぐ。ひと汗ふた汗、久しぶりの登山で息を切らす。やがて、石灯籠を左に見て、ひと登りで四浦半島へと続く主尾根に到着。

ここまで五十分。山中は倒木が多いが、登山に支障がないように始末してくれているのがありがたい。尾根筋をしばらく行くと、随所でツツジが目を楽しませてくれる。

行く手右に豊後水道が見えてくる。やがて日代からのルートと出会い、鳥居をくぐると数分の直登で山頂到着。

曇り模様であったが、豊後水道の展望は良好で、特に佐伯市街地を囲む山地から四浦半島にかけての山桜の景観が、春を感じるものだった。くじゅう連山、祖母・傾山系は残念ながら雲の中であった。『おきなぐさ』はまだ芽を出していなかった。

風が冷たく、早々と下山にかかったが、二十分ほど下った頃、山頂を目指す六人のグループと出会う。道を譲り挨拶を交わすと「おきなぐさは咲いていましたか？」と聞かれて「芽も出てませんよ」と答えたところ「あー」と残念そうな、ため息とも何ともつかない返事が返ってきた。

このグループを見送り、風に舞う山桜の花びらを身に受けながら下山を続けるが、登山路は落ち葉で滑りやすく、ストックを頼りに慎重に足をすすめる。登山口まで戻ってみると、先ほどのグループのものと思える車両は山口ナンバーであった。

登山ガイドブック、インターネット等、様々な「山」情報があふれているが、彦岳の『おきなぐさ』はどのように紹介されているのだろうか。大分百山、彦岳の小さな自生地のおきなぐさは身の丈以上の話題豊富な野草かもしれない。

この日の彦岳山行は、藪椿に迎えられ、山桜とツツジに出会った良い山行であった。さて、次はどこにしようか、静かな山行が出来れば一番であるが・・・・。

# 嗚呼　七年山（その1）

久保洋一

初めて七年山を意識したのは桑原山に登ろうとして地図を何度も見てたときだった。「へー七年山かどんないわくのある山だろう。なんで七年なんだ？」と思ったくらいだ。それから先月（'07.12月）中野さんと木山内岳から桑原山まで縦走したとき彼にとって七年山が特別な存在であること、また飯田さんが三度目のチャレンジで登ったこと、さらにそのことを会報に報告していたことも聞いた。

私にとっては桑原山があこがれて久しい山だったのでその周辺の山はその時点ではほとんど意識の外だった。その桑原山、最初は単独で黒内谷から県境のルート、二度目は先ほど書いた中野さんとの木山内岳からの縦走だった。でもこのようにして徐々に七年山を意識して地図を見る回数が増えていった。

いつか攻略しようという意欲も日に日に高まってきた。夏だと藪こぎがひどいだろう。もしやるんだったら冬枯れした今の時期がいい、なにせ登山道がないのだから…。次に考えるのはどのルートでということだけど、これは何度も地図を見ていたので自分がもっとも行ってみたいコースは早くから決まってしまった。それは一旦、

## 会員所属の山のクラブの紹介コーナー　（No.７）

# 「豊嶺会」

興田　勝幸　（８６１４）

地域の山岳会に所属していた河野信人氏（豊嶺会顧問、杵築市在住）を中心に、３人の創立会員により昭和４４（１９６９）年に準備会、４５年に大分県山岳連盟（以下、大分岳連）に加盟登録（１０名）し、名実ともに山岳会として歩き始める。日本山岳会がエベレストを登頂した記念すべき年である。

豊嶺会の歩みは大分岳連と共にあると憚りなく言える。これといって登山技術のない創立会員ゆえ、登山技術の場を大分岳連の技術講習会や加盟団体の岳友に頼った。当時の大分岳連は登山ブームの影響もあって各山岳会に「山屋」と呼べるいわゆる山狂いがいて、求めさえすれば登山技術の習得には事欠く事はなかった。そのうち会も一応の冬山、岩登りの技術を身に付け、創立１０周年の記念山行としてアラスカのマッキンレー峰に６名の登山隊を派遣する事が出来るまでになった。創立２０周年では会員の数家族とヨーロッパアルプスにハイキング隊、モンブラン峰の登山隊と総勢３０名余りを送ることができた。３０周年はチベットのニンチンタンラ山群の６３００㍍峰に８名の隊員を。４０周年ははたして…。

昭和６０（‘８５）年、大分岳連の第２次チベットヒマラヤ登山隊に多くの隊員を送って以来、その後の大分岳連主催の海外登山には多くの会員が関わり成果を上げて来た。また創立以来、毎月の月例会と月例山行は欠かした事がない。正月と５月の連休は南・北アルプスに出かける事が多い。

名称　豊嶺会（ほうりょうかい）
創立　昭和４５（１９７０）年４月１日　（大分岳連登録日）
顧問　梅木秀徳、伊東亨、河野信人
会長　初代 河野信人　　二代 興田勝幸　　三代 伊藤堂喜　　四代 佐藤春巳
　　五代（現在）清水剛
会員数　６８名
所在地　大分市大久保９組

基本理念として「くにさきの山から海外の高峰へ」オールラウンドな山登りで…。

山岳会と言うものはあくまでも個人が基調であって、その個々の成果が山岳会の評価そのものとなる。その意味において豊嶺会は個人こじんが自由気ままに山を楽しむというのが創立以来の一貫した気風である。登山者は増えても山岳会員の減少が続く昨今である。組織の永遠のテーマである新人の発掘と技術力アップを今一度確認して、永続性のある山岳会運営を手助けしたい。山の仲間はいい奴ばかりだから。

顧問の梅木秀徳支部長には、創立以来豊嶺会の後ろ楯としてお世話になっている。国東の山の山登りに始まり’８５年の大分岳連第２次チベットヒマラヤ登山隊、’９４年の日中友好登山隊の甘粛省、党河南山登頂、’０３年のカザフスタン国、天山山脈のムラモルナヤステナ峰登山隊と３度の主立つ高峰登山に同行させてもらい、つど都度適切なアドバイスをいただいた。梅木支部長の白い鬚は天山山脈登山から始まったものです。

ホームページがあります。　　「豊嶺会」　で検索して見てください。

桑原山の山頂まで登り尾根づたいに七年山に縦走して藤河内に向かう林道まで尾根を一気に北上しながら下っていこうというものだ。

地図（２万５千の）で見る限りとても快適なルートに思える。でも地図は地図だからなー。山頂近くに岩壁があってそれに行く手を阻まれるのではないだろうか？ザイルワークができなければ安全に通り抜けるのが困難な箇所があるのではないだろうか？山は深いし自分の登山技術が未熟な為に最悪の場合遭難なんて、次から次に不安な気持ちが持ち上がってくる。でもまだ登ってみたい気持ちが勝っているのだろう。なんとか行けそうな気がするのだ。

この不安と緊張感がいい、これが冒険心なのだろう。登れることがわかっている山に登るときには味わえない緊張感が自分を満たしている。この緊張感は新たな自分の発見へとつながる。よせよせ、そんな危ないとこという臆病な自分。怠惰で安逸を求め変化を嫌う自分。人に頼ってばかりで自分で道を開こうとしない自分。などなど日常生活ではあまり向き合えない自分が前面に出てくる。

このように自分の心の中でいろいろな葛藤が生じる。これが正直な人間の姿だと思う。最終的には行動を起こせるかどうかだ。「人間いたる所青山あり」だ。ちょっと用い方が違うかな？いろいろ考えても先には進まない。こんなときは宣言してみるのがいい。

「中野さん、一月最後の日曜日七年山に行きましょう。」「えっ、七年山に。どこから登るの？」と中野さん。「一旦、桑原山に登って七年山に縦走し、尾根を北上して藤河内にいたる林道におりるのです。」と私は自分で行ってみたいコースを言った。中野さんは「あそこの林道は絶壁で降りられないよ。」と言った。「地図で見ると少し東よりに尾根をたどれば絶壁ではなさそうですよ。まっ、現地を見てみないとよくわからないけど。」と私は答えた。「何時にでるの？」「朝一時に大分を出発して、三時から桑原山に登りましょう。」しばらく間をおいて「ほんとに行くの？」と中野さん「行きましょう。」と私は自分自身への決意とも思える返答をした。これが一月の月例（胡麻柄山）のとき中野さんと交わした会話だ。

それから、しばらくはお互い連絡もしなかったが出発日の前々日だったか、中野さんから「車はどうするの？」とメールがきた。私は「二台で行って一台は登り口ともう一台は下山予定地において登りましょう。」と返事をした。そしていよいよ登山当日だ。私はないことに前日から持っていくものをチェックし、準備を済ませておいた。ザックの重さは一〇kgを少し切っている。ＯＫだ。やっぱりいつもの山登りと緊張感がちがうのだ。

午前一時一〇分前、中野さんから携帯に着信あり。そのとき私は気づかず、すぐ後で折り返しの電話をすると「一階に下りているよ。」と中野さんの声。「わかりました。すぐ出ます。」と私は答え、中野さんの家に向かった。ちょうど午前一時に合流した。中野さんが七年山周辺の地図をパソコンで打ち出しておいてくれ、下山箇所を七年山の東にある林道として予定をたてておいてくれた。最初の予定と少し違うけど、より実現可能そうな下山ルートだ。中野さんの予定で下ることにして、いよいよ出発だ。あの七年山に！！

次回へつづく。

# 野津原の三角点のある山

安部可人、石川洋祐

小岳山（２８７．６ｍ）雪降り、東から野尻城へいく、城址に三角点、安武あり

実原（４１７．７ｍ）実原の集落、東へ竹林を直登すると簡単に三角点あり。何もなし

百木（５６９．１ｍ）三、四の道、交差点駐車。地図にない、南への狭い林道を登ると鞍部、五分も登ると右方向に三角点、何もない

高津公（３９５．２ｍ）実原を下る、沢の左からヤブに入る。荒れた墓地、すぐ林道、美しい竹林を登る、気持ちの良い道、三等三角点あり

赤仁田（５４３．１ｍ）古い林道、ジムニーでもこする。突き当たりに駐車、目の前の峰へ、植林の斜面、すぐに山頂

弓立（３９３．７ｍ）河原内川、赤仁田、弓立分岐を右へ、消防団の横に駐車。左にお宮、二ｍの山道へ入り尾根を下ること二〇分。コブに何もない三角点。集落へ急降下。

平原（２４９．１ｍ）河川プールの駐車場。一軒家の裏に入る。最後はウラジロ一〇〇ｍを突破。ＧＰＳの指示あるも、三〇分探しても三角点は発見できず。（帰りは左の境を下山。立派な獣道ナリ）

酢田（４２９．２ｍ）上の天面山登山口から二．四ｋｍ、左に狭い林道、その横、小竹の中、安武柱、三角点発見。

高取山（２７５．６ｍ）高取の集落、池に駐車、本宮山への登山道、道標の鞍部あたりから行くと三角点あり。

地吉（５２０．５ｍ）霊山の南登山口を一ｋｍ、谷を少しヤブこぎ、何もない三角点。

［そのほか］

霊山（５９６，０ｍ）塚野から登山道新設

本宮山（６０７．５ｍ）別になし

障子岳（７５０．８ｍ）地図の電波塔の建物の裏から昔の参道跡、突然宇曽神社の桜園にでる。

天面山（４０３．０ｍ）別になし

大津（２５０．２ｍ）河原内川の河川プールの手前、的場の集落を北へ林道をあがる。豚舎の上をトラバース、２８７の南東コル、急角度右へ、立派な尾根。二〇分、四等三角点。（おいしい豆腐店近く駐車が無難）

（別記）石川大分市百山に同行。地図はあと六枚あり、半分は終了。今回は野津原の東半分の記録。ほとんど四等三角点。赤テープ全くなく、安武以外に変な私標もあまりなし。我々も段ボール紙片に名前を記して記念撮影。あとはなにも残さず・・・。もう一度行きたい山は３９５．２と２４９．１。九〇歳なら２８７．６と４０３．０

# 総会と富山へ

西　孝子

三月二十一日、大分駅発十六時四十三分、特急『富士』にて東京へ。夜行列車の旅も九州からはなくなると聞き利用した。車内販売はないと聞き、夕食は持ち込む。

二十二日午前十時半、四谷駅より主婦会館のプラザエフ会場へいき、荷物を置いて近くの土手へ散歩に出る。

昭和三十年、三十一年と桜の幹にテープで印を付けているグループに会う。これらの桜は東京大空襲のあと、市民たちが植えたという説明板があった。見れば、枝を切り、根元の空洞にふといゼンマイを入れて土で盛っている。樹木医の手で、一本一本手入れしているのだ。ふとでくわした風景をぼんやりと眺めることにした。

五十年もたてば桜は老木になるんだ。春の花見の時にはこの木が、何万人の市民の心を豊かに育てたことだろう。見ればもう、今にも開きそうなほどに、蕾もふくらんでいる。樹木医の作業を見ながら、『桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿』と教えられた言葉は何だろうとふと思う。

十四時、総会開会、一〇四名の出席者。出欠、委任状等の返事は三分の一ぐらいらしい。社団法人も公益法人改正法により、年二回総会を開催しなければならない。これが共益的といえるのだ。

来年度の計画の中では、東九州支部は「青少年体験登山」「視覚障害者支援登山」「九重山系清掃・案内板・登山道の補修」の三つの事業を公益的事業として実行することとなった。

総会終了後、会費三〇〇〇円の懇親会をそっと抜けだし、東京駅発十六時十二分、新潟行きで越後湯沢へ。駅の前には雪、近くの宿へ行くが、予約していないので駅へもどり、富山行きに乗る。東横インに着いたのは二十四時である。

翌朝、朝食のおにぎりを一つ、みそ汁で出発。富山第一ホテルへ荷物をあずけて、富山市内地図をいただき県内物産館へ。輪島塗りの箸を買い、三十分ほどで科学館と美術館を見学する。この県には ノーベル賞受賞者が三名もいることを知る。

十五時半より、富山支部創立六十周年祝賀会へ。さて、この祝賀会へ参加した理由はというと、昭和三十三年に遡る。第十三回富山国体に、大分より五名で参加した。場所は剣、立山連峰コースで、もちろん当時はまだ立山アルペンルートなどの道路もなく、山道をたどった。途中で沢が雨で増水し、真ん中の岩に飛びうつったが、高橋の登山靴にシックス、セブン、ムガーと、今日のビブラムの靴底ではなかったが、それでもすべらずに切り抜けた。ザックもキスリングでよく頑張った。二十六歳。全国で女性三人の参加であった。

市中パレードで、県知事の奥様が挨拶に来られたこともあった。はるか昔のことであるが、思い出ふかいところである。

そして、富山支部長と事務局の二人には、『今西錦司の九州学問の旅』『昨年の十二支会』『全国支部懇談会（久住）』と遠くよりわざわざ参加いただいたお礼である。

会場は窓越しに剣・立山連峰の雪景色が、手に取るように見える部屋での式典である。雪山できたえた会員の集まりである。海外遠征者も多く、我が支部の幼さを考えさせられた。

記念誌と山の本をいただき、懇親会の途中で駅へ。越後湯沢で乗りかえて東京へは四時間七分で、二十二時着。長男宅に行き、一泊。翌日また『富士』に乗り、三月二十五日十一時十七分に大分着。そして我が家へ。四十九年前の夢をたどった旅であった。

大分、東京、富山、旅費五万八千四百九十円なり。

（富山市から見た剣・立山）

私の無名山ガイドブック33

# 里山の稜線歩き（その4）

飯田勝之

今回は大分市街地に近い里山稜線を歩いてみよう。

## 戸塚山（294.5m）

佐野植物園の背後にそびえる小高い山で、白山につながる背後の山並みが、丹生の台地にせり出した最後のピークで、高さの割りには目立つ山である。

登り口は植物園の入り口近く、園内散策路の入り口に「海崎線三七号」の送電線巡視路の標識がある。木クズを敷き詰めたクッションの良い道を数分で、マダケの林の中に巡視路が分かれており、その道へ入る。竹林はすぐにヒノキの植林地に代わり、黒いプラスチックでつくられた階段をジグザグに登り、緩く右（西）にトラバース気味に登ると数分で送電線鉄塔の下に着く。

ここを直角に左（東）にとり、鉄塔の下を通って登ると、照葉樹の二次林の中の、心地よい稜線歩きとなる。この稜線が嬉しい。傾斜が増してくると左がヒノキ、右が天然林の境目を登るようになり、さらに急な斜面を直登していくとほどなく山頂だ。北西から南東に長い山頂の、西の端に三等三角点があるが、それは無惨に四角が打ち欠かれて、それを補修したと思

（無惨に欠かれた三角点）

われるコンクリートも、一部を残して欠け落ちている。樹林の中の山頂は展望はない。

参考タイム＝植物園入り口～一五分～鉄塔～一五分～戸塚山

## 赤迫（151.4m）

宮河内ハイランドの背後に、ちょっとした、ファミリーハイクにはもってこいの稜線歩きコースがある。

宮河内ハイランドの東の端にある送電線鉄塔が登り口の目印だ。その奥に「大分末広線二八号」と書かれた、巡視路入り口の標識があり、コンクリート階段が急斜面に造られている。大きなシイの木があり、その下を黒いプラスチックの急な階段道が続く。約五分で送電線鉄塔下を通過し、振り返ると眼下に団地が広がる。さらに急斜面を登っていくと、約三分ほどで展望の良いピークに達し、背後に遠く大分市街地が望めるようになる。ビッグアイがひときわ目につく。

その少し先に二番目の鉄塔があり、その下を通って巡視路が南東方向に続いている。緩やかにアップダウンする稜線上に、ウラジロやコシダの生い茂った中、広い道がつくられている。アセビやリョウブ、コナラなどの明るい林が続き、近くに大きな団地があるとは思えない、のどかで野趣の豊かな道である。

緩く下った道が登りとなり、さらに登りつめると鈍頂に達する。ここが四等三角点のあるところで、この稜線上の最高地点。巡視路はここから東に下り、古い市道に通じている。

参考タイム＝宮河内ハイランドの東～二〇～赤迫三角点

## 高取山（275.6m）

本宮山から北に派生した支稜が、寒田、旦野原の方に落ち込んでいく手前の小ピークである。住床から奥に細い車道を進むと、高取の最後の民家を過ぎ、その先で林道が二ツに分岐する。直進する道は本宮山への登山道につながっている。その少し手前に、右に墓地に入る道があり、これを登ると墓地の横に、左（西）へ山に入る古い山道がある。この道を登ると、約一〇分で古い掘り割り状の峠に達し、そこは古い小道の十字路となっている。

峠から直角に左（南）に稜線にとりつき、左にモウソウ竹林が広がってきているのを見ながら稜線を上る。やがて両側がシイ、カシ、タブなどの照葉樹の美しい林となる。二次林であるが、見事に成長した照葉樹の極相林になっている。

心地よい稜線歩きは次第に傾斜が急になり、最後はかなり急な斜面を直登するようになる。そして、ヒノキの林が迫ると頂上である。狭い山頂は東半分がヒノキの植林、西半分が照葉樹の林となっており、四等三角点がある。

参考タイム＝高取～一〇分～峠～一五分～高取山

参考

高取山の点の記

埋標…昭和四〇年一二月一一日

順路…国鉄豊肥線中判田駅より旧国道一〇号線を北西に約一、二百行くと高江部落がある。同部落より西に住床部落を経て、約三、二百進むと高取部落に達する。本点は同部落西方山林の山頂にある。

# お知らせ

## 五月月例山行のご案内

・月　日…五月二五日（日）

・目的地…**500Mの山へ**＝長峰・501.5m（佐伯市宇目）、赤松山・501.0m（佐伯市宇目）

・出　発…五月二五日（日）午前五時サニー出発

## 六月月例山行のご案内

・月　日…六月二一日（土）

・目的地…**600Mの山へ**＝鬼下駄・602.8m（日田市小山町）、ヘリ山・610.4m（日田市大山町）

・出発…六月二一日（土）午前五時サニー出発

## 七月月例山行のご案内

・月　日…七月一二日（土）一三日（日）

・目的地…**700Mの山へ**＝桂木山・701.6m（山口県美祢市）、華山・713.3m（山口県下関市）東鳳翩山・734.2m、西鳳翩山・741.9m（山口市）

・出　発…七月一二日（土）午前五時サニー出発

・二日間かけて山口県の山を歩きます。

## 八月月例山行のご案内

・八月二四日（日）

・目的地…**800Mの山へ**＝熊群山・804.9m（由布市庄内町）、白石台・809.6m（由布市湯布院町）

・出　発…八月二四日（日）午前五時サニー出発

**※　月例山行の日程は土曜日の方が参加しやすいという声も聞かれますので、今年度は試しに、土曜日を半分組み入れてみることとなりました。**

# 事務局よりお願い

## 支部会費の納入について

会費未納の方には郵便振り込み

用紙を、支部報に同封していますので、年会費一〇〇〇円を振り込んで下さい。

## 韓国山岳会蔚山支部との交流会について

懇親会、涌蓋山山行、黒岳山行等、出来るだけ多数の参加をお願いします。参加の申し出をしていない方で、追加される方は事務局へご連絡下さい。

## 会員名簿について

総会に欠席された方には総会資料と名簿を同封しています。名簿に間違い等が有りましたら事務局へご連絡下さい。

## 後記

○　大船林道から法華院へ向かうとマンサクがいっぱい咲いていた。そして、今日はもう桜の開花だ。また、心浮き立つのは八坂神社春の祇園祭の人形山車。

○　地区の人はこれを“にんぎようやま”と呼び“だし”とは言わない。四月二八、二九の両日は、時代劇に飾り立てた三体の人形を乗せた、各町ごとの豪華な山車が一〇数台、深夜まで練り歩く。特に、灯を入れたそれらは絢爛豪華で、人々は自分の町の人形と山車に満足し江戸時代からの伝統を誇る。

○　今は道路が広くなったので、家の庇につかえそうだとか、電線に接触しそうだとかの心配はなく、合図の笛や拍子木は昔のようには聞かれなくなったが、山車同士がけん制し合う際の緊張したピピーッやカチカチカチ、若連中の掛け声など聞けば家を飛び出し否が応でも盛り上がる。勇壮さは失っていない。

○　もうそろそろ小学生の子等が鉦や太鼓の練習に取り掛かる時期だ。当日は幕に隠れてその姿を見ることは出来ないが、コンコンチキチキ、コンチキチンと遠く小さく聞こえだす音は祭りが近づいたことを知らせ、日々の安穏へと誘ってくれる。

（長野）

○　ＧＰＳの威力はすごい。大久保集落から稜線に出るとヤブと風倒木、その中を導かれるままに進むと、「目的地につきました」と教えてくれる。石川さんが一〇分後、四等三角点(239m)を掘り出した。

○　視力が弱ってきて、二万五千分の一の地図がわかりにくい。その点、ＧＰＳの等高線はよく見える。それにより、現在地も分かる。便利の良いものができたものだ。

（安部）

○　先日、一月の山行きで行きそびれた胡麻柄山を目指して登った。と書いておこう。

○　胡麻柄山の南西の尾根に登って見ると、そこには標高六百十メートルの山容は、標高三百メートルの窪地に成っていて、日々低さを増していっている。

○　その石灰岩は高速道路やビルに変身して我々を支えているのだが、果たしてどれだけの人々がこの現実を認識しているのだろう。

（中野）

○　四〇号は、出来上がった原板（一太郎）を印刷担当者にメールで転送した時に、なぜか九ページの「支部の先達を語る④」が二行のはずが三行になってしまい、それが最後のページまで全部影響し、変なところに空白が出来たり、文章がズレたりと、中途半端な構成になってしまいました。

○　役員会にお願いして、新年度支部予算で『DocuWorks』を買って頂くことになりました。これで編集や校正も効率よくできるようになると思います。

○　今回は投稿も多く、大分にぎやかな紙面になりました。やはり会報は会員の投稿があってこその機関誌ですから、皆様の投稿をお持ちしています。

○　一年のうちで、春の一時期だけその存在を教えてくれるヤマザクラ。今年も「ああ、あんなにあったんだ、ヤマザクラが・・・」と思わせて、気づいたらもう、周りの緑の中に姿を隠してしまいました。

○　でも、まだ少し標高の高いところでは、冬枯れた山肌に白い模様をみせています。

（Ｋ・Ｉ）

## ここは何処？

・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？

・　お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。（二名までで、正解多数の場合は抽選します。）

・　締め切り五月三一日

前回の正解は鹿納山から見た大崩山の七日廻岩と上ワク塚を撮ったものでした


日本山岳会東九州支部報　第４１号

２００８年（平成２０年）４月２５日（金）

発行者　梅　木　秀　徳

編集者　飯　田　勝　之

発行所　〒870-0021

大分市府内町１－３－１６

サニースポーツ内　西　孝子方

TEL･FAX　097-532-0926

題字　（故）佐藤正八